

令和 4 年 9 月 7 日現在

機関番号：37701
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2016～2021
 課題番号：16K16722
 研究課題名（和文）マックス・レーガー歌曲の統辞論的研究

研究課題名（英文）A Syntactic Study of Max Reger's Lieder

研究代表者

伊藤 綾 (Ito, Aya)

鹿児島国際大学・国際文化学部・教授

研究者番号：50767043

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、マックス・レーガーの歌曲を統辞論的に分析することを通して、以下の大きくふたつの成果をあげることができた。

- 1) リヒャルト・シュトラウスとレーガーの共通するテキストを持つ歌曲を比較分析することにより、レーガー作品におけるシュトラウスの影響と、そこから独自の作曲技法を追求したレーガーの姿勢を具体的に明らかにした。
- 2) レーガーの独唱歌曲の分析を通し、ひとつないし複数のモチーフを楽曲全体に拡張させる手法。1小節のみの拍子記号の変化をもつ楽曲において、拍子記号（視覚的情報）と拍節（聴覚的情報）に齟齬を持たせる手法。のふたつの独自の作曲技法を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マックス・レーガーはさまざまなジャンルにおいて数多くの楽曲を残しているが、多種多様な技法を駆使しているため、これまで「レーガーらしさ」すなわち「レーガー独自の作曲技法」について具体的に明らかにした研究はほとんどなかった。その点から、本研究でふたつの「レーガー独自の作曲技法」を明らかにしたことは、レーガーの作品分析研究において大きな一歩となったと考える。とくに歌曲のジャンルにおいては、一部の歌曲ばかりが分析される傾向にあったが、本研究でこれまで誰も取り上げなかった歌曲を考察したことは、今後のレーガーの歌曲およびその他のジャンルの研究においても、重要な布石になったと言える。

研究成果の概要（英文）：The results of this research are as follows:

- 1) Through the comparative analysis between Richard Strauss's and Max Reger's lieder, they were clarified what is Strauss's influence on Reger and how Reger pursued his original composition techniques.
- 2) Through the analysis of Reger's solo lieder, the two original composition techniques were clarified: one or some motives are expanded into the whole of a song. The time signature (= virtual information) and metric (= auditory information) are contradicted in the songs that have the changing of time signature for a measure.

研究分野：音楽学

キーワード：マックス・レーガー ドイツ歌曲 韻律と拍節の関係 言葉と音楽の関係

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したドイツ人作曲家レーガーは、J. S. バッハからワーグナーに至るまで、さまざまな作曲家の影響を受けつつも、同時代の作曲家であるヴォルフ、マーラー、R. シュトラウスとは一線を画す独自の作風を確立し、あらゆるジャンルの作品を数多く作曲した。

それにもかかわらず、レーガーの作品研究は世界的に立ち遅れているのが現状である。1998年にようやくドイツのカールスルーエ市にマックス・レーガー研究所が設立され、資料の収集・整理、書簡集の出版、CDの出版、定期演奏会等が精力的に進められているが、作品そのものに関する研究、すなわち楽曲分析の分野は、質・量共に手薄と言わざるを得ない。

とりわけ声楽作品の分野においては、250曲を超える歌曲が存在し、近年は演奏会で取り上げられる機会も増えつつある。その一方で、詳細な楽曲分析研究はほとんど手付かずと言ってよい。先行研究も特定の作品に限られたもので、ドイツ歌曲において最も重要な役割を担っている韻律と拍節の問題には深く立ち入っていない。

2. 研究の目的

世界的に研究の立ち遅れているマックス・レーガーの歌曲を、統辞論的手法を用いて分析することにより、レーガーの歌曲作曲技法および歌曲史における位置づけを明らかにする。

3. 研究の方法

- 1) マックス・レーガー研究所と協力し、現存するレーガー歌曲とそれに関わる一次資料を再調査する。
- 2) 統辞論的手法を用いてレーガーの歌曲全曲を分析する。とりわけレーガーが好んだ音楽における諧謔性の表現に韻律と拍節の関係がどのように関連しているのかを考察する。
- 3) レーガーの歌曲作曲手法における他の作曲家からの影響を考察する。

4. 研究成果

以下に年度ごとの研究成果と、本プロジェクト全体としての研究成果をまとめる。

2016年度

初年度は、レーガー作品全般における特徴とされている「ユーモア」を研究の取っ掛かりとし、歌曲においては具体的にどのような手法で「ユーモア」が表現されているのかを、クリスティアン・モルゲンシュテルンの詩をテキストとする歌曲全8作品の分析を通して明らかにすることを試みた。その結果、音楽要素のみによる「グロテスク」なユーモアと、韻律と拍節の関係を通してのユーモア、というふたつの特筆すべき作曲法が明らかとなった。

2016年度の成果は、日本音楽学会第67回全国大会(2016年11月12日)にて発表(タイトル「マックス・レーガーの歌曲における諧謔性」)したほか、論文「マックス・レーガー歌曲の統辞論的研究－韻律と拍節の関係にみるユーモア－」(『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第17巻第4号、2017年)としてまとめた。

2017年度

2017年度は、レーガーの作曲技法のヴァリエーションを明らかにするために、彼が同一の詩に2度作曲した唯一の歌曲である作品79c-4(以下1901年版)と作品76-25(以下1905年版)を比較分析した。その結果、1901年版にはフレーズ末に一貫して同一の音高線の操作が見られ、1905年版では第1節の第1～3詩行で用いた7つのリズムモチーフをそれ以降のテキストに対しても様々な組み合わせで用いていた。これらのことから、レー

ガーはふたつの「Friede」において、それぞれの核となる音楽要素は異なるものの、共に「ひとつのモチーフとそのヴァリエーションで歌唱声部を構成する手法」を用いており、これが彼独自の作曲技法のひとつと考える基盤となったと考えられる。

2017年度の成果は日本音楽学会第68回全国大会(2017年10月29日)にて発表(タイトル「マックス・レーガーの統辞論的研究－ふたつの《Friede》op. 79c-4とop. 76-25の比較分析を通して－」)したほか、論文「A Study of Max Reger's Lied Composition Techniques: Comparative and Syntactic Analysis of Two Frieden, opp. 79c-4 and 76-25」(『鹿児島国際大学大学院学術論集』第11集、2019年)としてまとめた。

また、2017年度は本研究の社会的還元活動として、勤務校のオープンキャンパスにて、大学院生によるレーガー歌曲7曲の演奏を企画・開催したほか、鹿児島国際大学ミュージアムの合同企画として『孤高の作曲家マックス・レーガーとユーモア展』を開催した。なお、この展示会にはアクティヴ・ラーニングの一環として展示パネルの作成に音楽学科学部生を関わらせた。加えて、モーツァルティアン・フェラインの例会においても「W. A. モーツァルトとM. レーガーにみるユーモアの共通性」というタイトルで本研究成果と関係させた講演を行った。

2018年度は産休を取得。

2019年度

2019年度は、レーガーの作品を他の作曲家の作品と比較することにより、「レーガーらしさ」を明確化することを試みた。その具体的な手法として、リヒャルト・シュトラウスとレーガーの間でテキストが共通する13の歌曲を比較分析し、シュトラウスからの影響や、レーガーの独自性を考察した。その結果とりわけ両者の歌曲 *Leise Lieder* の比較において、興味深い分析結果を得ることができた。具体的には、歌唱声部の旋律線の動きやピアノ声部の和音は一見、先に作曲したシュトラウスの楽曲構造をレーガーが模倣したようにも感じられる。しかし、それぞれの楽曲独自の作曲技法に注目すると、シュトラウスは和声的期待感の裏切り、レーガーはフレーズ末の音高線の同一性という全く異なった要素によって、それぞれが最も重きを置きたい「言葉」を強調していることが明らかとなった。

2019年度の成果は、第5回東アジア国際音楽学会(IMS-EA)蘇州大会(2019年10月19日)にて発表したほか、論文「A Comparative and Syntactic Analysis of Richard Strauss's Lied *Leise Lieder* and That of Max Reger」(『鹿児島国際大学大学院学術論集』第12集、2020年)としてまとめた。

2020年度

2020年度は、リヒャルト・シュトラウスとレーガーの間でテキストが共通する13の歌曲の中に、1小節のみの拍子記号の変化が行われている曲がそれぞれ4曲ずつあり、そのうち2曲はテキストも共通していることに注目し、それらの比較研究を行った。その2曲のうちとりわけレーガーの *All' mein Gedanken* において、同じテキストを持つシュトラウスの歌曲に見られる作曲技法を意図的に模倣している部分と、意図的に模倣を回避している部分が顕著に見られた。ここから、レーガーがシュトラウスから学んだ部分と、独自性を追求した部分を明確化することができた。

2020年度の成果は、論文「リヒャルト・シュトラウスとマックス・レーガーの 私の想

いのすべて All' mein Gedanken」(『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第21巻第4号、2021年)としてまとめた。

2021年度

最終年度は2020年度の研究から発展させ「レーガー歌曲における拍子記号の変更の独自性」に的を絞り、分析と考察を行った。レーガーの歌曲289曲中、1小節のみの拍子記号の変更が用いられている曲は42曲存在する。これらの拍子記号の変化と拍節の関係を分析したところ、それらは拍子記号と同様の拍節に変化するもの、と拍子記号とは異なる拍節に変化するもの、に分類することができた。19世紀末～20世紀の作曲家の多くは、テキストの特定の言葉を強調するために歌曲において「1小節のみの拍子記号の変更」を用いているが、レーガーの場合はにおいて言葉の強調は意図されていなかった。それどころか拍子記号＝視覚的情報と、拍節＝聴覚的情報の齟齬を生み出し、それを独自の作曲技法として用いていることが明らかとなった。

2021年度の成果は日本音楽学会第72回全国大会(2021年11月13日)にて発表したほか、論文「レーガー歌曲における拍子記号の変更の独自性－お前は我が心の冠 作品72第1曲を例として－」(『鹿児島国際大学大学院学術論集』第22巻第4号、2022年)としてまとめた。またレーガーの初期歌曲作品における作曲技法については、2022年10月21～23日に開催される第6回東アジア国際音楽学会(IMS-EA)大邱大会にて発表(タイトル「Originality of the Time Signature in Max Reger's Early Songs」)することが決定している。

以上の過程を通して、本プロジェクトでは次の大きくふたつの成果をあげることができたといえる。

1)リヒャルト・シュトラウスとレーガーの共通するテキストを持つ歌曲を比較分析することにより、レーガー作品におけるシュトラウスの影響と、そこから独自の作曲技法を追求したレーガーの姿勢を具体的に明らかにした。両者の比較研究はこれまでも存在したが、その結論はいずれも、両者の作品に優劣をつける結論に終始していた。本研究では、それぞれの作曲技法の特徴と、とりわけレーガーの作曲技法の独自性を明確化した点で、先行研究とは大きく異なる成果を残すことができたと言えよう。

2)レーガーの独唱歌曲の分析を通しひとつないし複数のモチーフを楽曲全体に拡張させる手法。1小節のみの拍子記号の変化をもつ楽曲において、拍子記号(視覚的情報)と拍節(聴覚的情報)に齟齬を持たせる手法。のふたつの独自の作曲技法を明らかにした。

マックス・レーガーはさまざまなジャンルにおいて数多の楽曲を残しているが、多種多様な技法を駆使しているため、これまで「レーガーらしさ」すなわち「レーガー独自の作曲技法」について具体的に明らかにした研究はほとんどなかった。その点から、本研究でふたつの「レーガー独自の作曲技法」を明らかにしたことは、レーガーの作品分析研究において大きな一歩となったと考える。とくに歌曲のジャンルにおいては、これまで一部の歌曲ばかりが分析される傾向にあったが、本研究でこれまで先行研究の無い歌曲を考察したことは、今後のレーガーの歌曲およびその他のジャンルの研究においても、重要な布石になったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 伊藤綾	4. 巻 22
2. 論文標題 レーガー歌曲における拍子記号の変更の独自性 お前はわが心の冠 作品72第1曲を例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『鹿児島国際大学国際文化学部論集』	6. 最初と最後の頁 303-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤綾	4. 巻 題12集
2. 論文標題 A Comparative and a Syntactic Analysis of Richard Strauss's Lied Leise Lieder and That of Max Reger	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿児島国際大学大学院学術論集	6. 最初と最後の頁 41-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤綾	4. 巻 第21巻第4号
2. 論文標題 リヒャルト・シュトラウスとマックス・レーガーの 私の想いのすべて All' mein Gedanken にみる類似性と独自性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島国際大学国際文化学部論集	6. 最初と最後の頁 305-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Aya Ito	4. 巻 第11集
2. 論文標題 A Study of Max Reger's Lied Composition Techniques: Comparative and Syntactic Analysis of Two Frieden, opp. 79c-4 and 76-25	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島国際大学大学院学術論集	6. 最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤綾	4. 巻 17巻4号
2. 論文標題 マックス・レーガー 歌曲の統辞論的研究 韻律と拍節の関係にみるユーモア	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 鹿児島国際大学国際文化学部論集	6. 最初と最後の頁 245-252
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 伊藤綾
2. 発表標題 レーガー 歌曲における拍子記号の変更の独自性- お前はわが心の冠 作品72第1曲を例として-
3. 学会等名 日本音楽学会第72回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Aya Ito
2. 発表標題 A Comparative and Syntactic Analysis of Max Reger's Leise Lieder Following Richard Strauss
3. 学会等名 The Fifth Biennial Meeting of the International Musicological Society Regional Association for East Asia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤綾
2. 発表標題 マックス・レーガー 歌曲の統辞論的研究-ふたつの《Friede》 op.79c-4とop.76-25の比較分析を通して-
3. 学会等名 日本音楽学会第68回全国大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤綾
2. 発表標題 マックス・レーガーの歌曲における諧謔性
3. 学会等名 日本音楽学会第67回全国大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関